

幼児の集団生活態度の発達と 指導の段階

千代田区立富士見幼稚園

幼児は、幼稚園にきてはじめて集団生活にはいり、その中で次第に自己を発揮し、友人と交わり、さらにグループ活動を発展させてゆく。これは幼稚園におけるもっとも重要な経験のひとつであり、そのためには適切な指導を必要とする。それでは、幼児は集団生活の中で、どのように社会的な発達をし、それはどのような順序で、どのような機会に指導してゆけばよいのであろうか。

そのために、私も、幼稚園における幼児の集団生活態度に関連のある事例を集めて、それを発達段階にしたがって分類してみた。その事例は数多くあったのであるが、次のようなりつの段階に自らわかれた。

1、自己活動ができない

- 2、自己活動ができる
 - 3、自己主張ができる
 - 4、友だちに関心をもち
 - 5、友だちと触れあう
 - 6、友だちと交わる
 - 7、グループにはいる
 - 8、グループ意識をもつ
 - 9、グループでたのしく遊ぶとする
- 次に各段階について、事例を引用しながら、その段階では幼稚園ではどのような指導をするのかについて述べることにする。

「自己活動ができない」から「自己活動ができる」

「自己主張ができる」までの指導上の留意点

1、教師とのつながりによって、園生活への不安をとりのぞく

母親から離れて、始めての社会生活では、先生にたよること、不安な気持ちをささえている。そこで、まず、先生がこわいというような先入観をとり、常に話しかけたり、聞いたりして、幼児に親しみ、仲よしの先生でなければならぬと思う。次の事例（先生に話しかけられ、にっこり笑った）のように幼児の不安な気持ちを、しだいにほぐしてやるようにする。

△先生に話しかけられ、にっこり笑った。▽

四月十九日（金）雨 場所 廊下

その場の状況 保育室入口の柱にもたれ、廊下をいきかう子どもたちをみている。ときどき保育室には、はいてくる友だちの目をおいながら、黙って立っている。

事例 立っているのが疲れたのか、運動靴をいじりながらしゃがみ、じっとしている。「美佐子ちゃん、先生と遊びましょう。」

と声をかける。下を向いて黙っている。「おへやでままごととしているわ。先生といっしょに、お客さまになって行きましょうよ。」首をふる。「美佐子ちゃん、お家でだれと遊ぶの。」少し間をおいてから「きみちゃん。」（きみちゃんは妹）「何して遊ぶの。」小

さな声で「おままごと。」「美佐子ちゃん、おかあさんになるの。」と言うと、立ちあがり「ちがうの。きみちゃん。」「こんど先生とままごとしましょうね。」と言うと、にっこり笑う。

考察 いつも、黙って友だちの遊びを遠くからみている。話しかけても、下を向いて声を出さない。きょうは、好きなままごとで話しかけたことが、美佐子にとつてうれしかったのかもしれない。

2、いろいろな遊具、玩具によって、自分で遊べる機会を与える

遊びを傍観していた状態から、自分としての動きをためそうとすると、何に関心や興味をもっているかをみきわめ、その方向に誘導することは、重要なことであろう。次の事例（自分の得意なハーフボールで遊ぶ）は、遊具によって、ためしてみる場を与えたことで、これだけできるという自信を、子ども自身もつようになった。このように、物を媒介として、その子どもの能力に感じ、自己活動のできる場をつくり、なれさせ、ためきすことではないかと思われる。

△自分の得意なハーフボールで遊ぶ▽

九月十三日（金）晴 場所 屋上

その場の状況 一週間つづけて、ハーフボールで遊ぶ。きょうも、美紀子を連れて屋上へ行く。

事例 屋上に行くと、まず、ハーフボールにとびつくが、大ぜいの子どもがいると遠慮して、ヘリをさわっているだけである。私が「さあ、美紀子ちゃん、たくさん回して遊びましょうね。」と言うと、下のわくに足を乗せ、力強くかまえている。三、四回、回してくるうちに、男児が四、五人はいつてきた。力が加わると「ワァー、キャー。」という歓声がわく。その中で、二、三人の子どもは、すぐおりてしまうが、美紀子は最後までがんばっている。私が離れても、ついでこなくなり、他の友だちと歓声をあげて、ハーフボールで遊んでいた。

考察 入園したころ、なにげなく、たいこ橋の上まで登って、とびおりてきたところを数回みた。いつも、口をむすび話をしないで、私のあとについて歩いているだけであつたのになぜ、このように活発に手足を動かしたのだろうかと考えさせられた。そこで、美紀子は、運動遊具で遊ばせることによって、自己活動ができるようになるのでは、ないかと思う。特にハーフボールはお気に入りのようである。そのためか、私から離れて活動できるようになったと思われる。

3、友だち遊びに誘い、なれさせるようにする

自分としての活動ができるようになると、遊ぶことの楽しさがわかってくる。そこで、ひとり遊びから、しだいに友だち遊びに誘い、遊びのふんいきになれさせる。また、その子どもと、性格のあ

いような、抵抗を感じさせない友だちを、選んでやるように配慮する。次の事例(ひとり遊びから、友だち遊びに誘う)のように、教師は、その場の状態をとらえ、指導することがたいせつであると思う。

そこで、次頁の事例(いつも、仲間にはいれない子どもが、手を汚して遊ぶ)のように、入園当初は、手洗い、うがいなど手洗い場に連れていっても、しようとしなかった。その後、自己活動ができるにしたがつて、自然に洗うこと、うがいをすることの必要性が理解され、自分から進んで実行するようになった。

△ひとり遊びから、友だち遊びへ誘う。▽

五月二十二日(火)晴 場所 保育室

その場の状況 次郎、きげんのいい顔をして、保育室を出たりはいたりして、ひとりあそびをしている。登園時であるので、他の子どもの遊びも、まだ始まっていない。

事例 「わたるちゃん、次郎ちゃんと遊んであげてっ。」と声をかける。次郎も、遊ぶ気になつたらしく、かごにはいった小型積木を自分で持つて来る。私が、おもちゃの動物のはいった箱をそばに置くと、わたるが、動物をひとつとり、「次郎ちゃんこんな」という。次郎、だまって動物をひとつとる。それぞれに、積木で

動物の家を作り始める。

行夫、司、光雄、良夫、久夫らが、順次仲間にはいつてくる。

光雄が、次郎の隣へ続けて作り始めると、次郎はやめて、他の場

所へ行つて別に作り始める。四階建ての家に動物を乗せて、うれしそうに私の方を見る。「何階建て？」と声をかけると、だまつて指を四本だす。わたるが「いい景色だなあ」といいながら、次郎の家の上を通る。久夫の動物が、次郎の四階まであがつてこわしてしまふ。わたると久夫が、それを直し始めると、次郎、一歩退いて見ている。昌夫がきて、わたると話しはじめると、ずつと身を退けて、あきらめたようすで手をださない。

「次郎ちゃん、ここがあいているからいらっしやい。」と反対側の方へ誘う。次郎素直に反対側へ来ると、新しく作り始める。(前と同じ形をつくる)私、動物のきりんを持って行つてやる。次郎、高く積んだのがこわれると、ニコリと私の方を見ては、また同じ形に積みあける。

五分ばかり、他の子どもに声をかけて歩いてみると、次郎が私の背中をたたく。見ると、今まこと違つた家が、ずつと大きく建てられていく。「まあ、いいおうちね、だれのうちっ?」「ぼくの。」と消えるような声。そのとき、昌夫、わたる、良夫、真理も、それぞれに家を作つていたので、「みんなのおうちへ行かれるように、道を作らない。」と全休に声をかける。「さあ、次郎ちゃんもお客さまになつて行つていらっしやい。真理ちゃん、次郎ちゃんが遊びに行くからおねがいね」と私。次郎の動物は、自分の家を出ると、真理の所へ行く。だまつているので私「こんにちほつて、」

ないの？」次郎「コンニチハ」真理「どうぞおはいりください」次郎だまつて真理の家にはいる。真理「ちょっとお使いに行つてきます。」と、ままこと用の茶わんを持って来る。盛んに食べるまねをする。こんどは、自動車を持って来て、自分の動物と、次郎の動物を乗せて外へ出る。このとき、昌夫の動物が飛行機に乗つてきて、この自動車に墜落する。と、次郎は自分の動物を自動車からおろす。

私、真理のそばへ行つて「次郎ちゃん、だまつておられたの？」ときくと「ちがうよ、サヨナラつていったよ。」「ワァーさよならができたの、おりこうね、次郎ちゃん、だんたんお話かじょうずになるわね」と私。次郎、こんどは、積木に動物を乗せて動かしはじめ。ヘリコプターだという。

このとき、他の連中は、盛んにヘリコプターや、飛行機に乗つて、爆弾を落としたり、墜落してみたりしていた。

八月二一日(金)晴 場所 屋上

その場の状況 私のみえるところで、なんとなく立っていたり、運動場をみながら栄子と小さな声で話している。

事例 美佐子、栄子、小さな声で話している。私と顔があうと、下を向いてしまふ。「美佐子ちゃん、何、お話しているの。」と聞くと、「あのねえ、あのねえ。」とあとは、つつかない。そこ

で、他の子どもと鬼ごっこを始める。そして、ふたりを誘ったがはいらない。しばらくして、ふたりは私のところへとんできて、ボンボンとたたいて「ほら！」と言う。みると、かわいい手がくろくよざれている。「あら！まっくろね。」「ウフッ！」と笑って行ってしまふ。それからまた、私をたたいて、「ほら！」と「行って、手をみせる。「わあ、きれいなったのね。」と「ううと、笑って行ってしまふ。それを、二、三度くり返していた。

考察 美佐子はいつも、うがいをしませう。手をあらいましうといつても、「家でしてきたからいいの。」の、一点はりで手もあらわれない状態であった。屋上で、友だちの遊びを傍観しているだけではつまらなくなつて、なんとなく下すりにさわつて汚れたことに興味を持ち、あらつて楽しんでゐる。この子にとつては、活動開始の知らせのように思う。

4、自分の思ったことをいえるようにする

自己活動に消極的な面がみられるこの段階では、気楽に話し合えるふんい気をつくり、どんな簡単なことでも受けいれ、誠意をもつて聞いてやることは必要である。次の事例（新しいコップをみせて、初めて自分から先生に話しかける）のように、話し始めのときは、大きな抵抗もあり、勇気もいることであるので、この機をのがさず、子どもの気持を受けとめ、喜んでやる。

こうして、ことはで教えるのではなく、小さなことでも喜びあえるふんい気が、共によるこぶ態度の芽ばえを、はぐくむのではないかと思う。

△新しいコップをみせて、始めて自分から先生に話しかける。▽
七月二日（火）晴 場所 廊下

その場の状況 二、三人の子ども、「先生、ぼくきょうは、コップ持ってきたよ。」といってくる。美佐子、保育室の入口で立っている。

事例 他の子どもが、保育室にはいってしまったと、私のそばへきてボン！とたたき「先生、わたしもコップ持ってきたの。」「忘れなかつたのね。」「あのねえ、新しいの買ったのよ。」「わあ、きれいなコップね。」「うん！」といつて、うれしそうな顔で、保育室にはいって行く。

考察 前の日から、おやつが始つたが、コップを忘れた子どもが多数いたので、持ってくるように話をした。それで、登園して、すぐ他の子どもが、私に報告するのを見て、新しいコップを買つてもらつたうれしさを、自分も早く私に知らせたいようすであった。友だちが行つてしまふのを、待つていたらしい。いつも、話しかければ話をするという状態であつたが、自分から、話ができたとすることは喜びであつたのであろう。

二「友だちに関心をもつ」から

「友だちとふれあう」までの指導上の留意点

1、友だちに親しみをもたせ、安定感をもって遊ばせる

はじめて会った大せいの友だちには、不安な気持もあるので、友だちの顔やなまえを早く覚え、親しませることが第一である。そのため、いろいろな機会に友だちと接するようにしむける。しかし、次の事例（こわがっていた友だちと、いっしょに絵をかくて安心する）の子どものように、なにか原因があつて、友だちをこわがるようなときは、教師は積極的に、それをとりのぞく機会をつくっていくことが必要になってくる。

△こわがっていた友だちと、いっしょに絵をかくて安心する。V

五月二〇日（金）九時三〇分 星 場所 保育室

その場の状況 朝の自由あそびの時間、数人のこどもが大きな紙にえのぐ遊びをしていた。民夫か、なにかかきたいといひにきた。澄江もやりたそうである。（澄江は入園してまもなく、民夫に乱暴され、幼稚園を恐れていた。）

事例 民夫と澄江とそれに悦子もさそつて、三人で一枚の紙を使わせ、えのぐも豊富に用意した。三人はそれぞれにいろいろな色を使ってかいていたか、線と線がぶつかり、だんだん余白が少な

くなつてくると、うれしそうにはしゃいでいる。とうとう民夫が赤いえのぐのびんをひっくり返してしまい、こぼれたえのぐを三人が大騒ぎして紙の上にかき回し始めたときは、夢中になっていた。しばらくして、他の子どもの世話をしていた私の所へ澄江がやって来た。「先生、民夫ちゃんとお友だちになつたの。」と言

げた。

考察 澄江が民夫を恐れて幼稚園へ来たがらなくなつてから、私は彼女に安心するように話をしたり、いっしょに遊んだりしながら、民夫とうまく遊べる機会を待った。また、民夫への抵抗感をなくす方法をいろいろ考えたが、なかなかよい方法がみつからなかった。えのぐ遊びは、自分のやりたいことを表現しながら、お互いのつながりができてきたので、今までの抵抗感がなくなつたのであろう。

その後 民夫が落ちついているときに澄江といっしょに絵本よみにさそつたり、リズムあそびでいっしょにおどらせたりして、ふたりがいっしょに遊ぶ機会をつくつて行つた。

2、友だちに関心をもちはじめめる状態をみのがさない

一応、園生活に安定感をもつと、いろいろなきっかけで、友だちへの関心が高まつてくる。しかし個人差は大きく、積極的に関心を

示せない子どももいるので、教師は、ちょっとした関心の芽ばえも見逃がさず心にためて、指導のきつかけにする。次の事例（友だちもブランコにのせて遊ぶ）は、こうして友だちに関心をもちはじめた子どもが、自覚的にあそぼうとするようすがうかがえる。

これらの子どもの活動は、それぞれが、いろいろな場で経験していくことがのぞましいので、自由あそびの時間を多くとって、活動をさかんにさせる。

△友だちもブランコにのせて遊ぶ。▽

四月一六日（火）九時一〇分 晴 場所 園庭

その場の状況 だいたい全員登園したのを見て、下の庭園へ連れ出す。子どもたちは、おもいおもいの遊具へとんでいく。尚一やゆかりたちはそのまま私のそばに立っていたので、ブランコの所へ連れて行く。

事例 フランコのひとつがあいていたので、一番前にいた尚一に「尚ちゃんあいてるわよ。」というとき、尚一はどきまぎした表情で、にこにこ笑っている。まもなく隣のフランコがあいた。すると、尚一はゆかりの手を引いてフランコにのせ、隣に自分が腰かけて、うれしそうに顔をみ合わせる。

考察 尚一もかわりも、あまり積極的に遊べない。前日、帰りにふたりで手をつながせたら、うれしそうにしていた。フランコによって更に親しみをもったことと思う。

3、遊具を媒介として、友だちのふれあいをさかんにさせる

子どもの気持が安定してきたら、できるだけ遊具を媒介として、友だちとの交渉の場をもたせる。しかし、ごく初期のこの段階では遊具をなるべく多くして、ひとりひとりが満足して遊べるように配慮することが必要であろう。

4、共通経験をできるように、しむける

この時期は並行的な遊びが多くみられるが、なるべく共通経験させるようにしむける。次の事例（ままごと道具をかって友だちになる）は、並行的なあそびを共通経験にもっていったことで、お互いの親密感を深めている。

また、この事例のように、遊具に対しても、友だちとの結びつきにしても、独占しようとする自己中心的な気持が強いから、だんだん社会性のある態度を身につけさせていくことが必要であると思う。

△ままごと道具をかって、友だちになる。▽

七月四日（木）九時 晴 場所 保育室

その場の状況 宏子がままごとを始めた。他に何人か友だちがいて、宏子がおかあさん役でごちそうをつくっている。そこへ昌子が登園してきた。昌子は、入園以来私のそばについていることが

多かったが、やっと二、三日前、ひとりでもまごどあそびをはじめ、いつも私をお客さんに呼んでいた。きょうも楽しみに登園してきたようだ。

事例 昌子「先生、ままごどしたいの。」「どうぞおやりなさい。」「でも宏子ちゃんがしてるの。」「じゃあ、いっしょにいられてもらったら?」「いや、わたしおかあさんですもの。」「それじゃあ別の家をつくる?」「うん。」「勢よく昌子はとんでいく。宏子から少し離れて昌子はごぎを敷き、いすや積木でお座敷をつくる。そのとき私は二、三分その場を離れた。帰ってみると、宏子と昌子がおさらをひっ張り合ってにらみ合いの最中。「どうしたの?」と私。「宏子ちゃんわたしにおさら貸してくれないの。」「わたしままごどしてんだもの。」「すこし貸してくれたっていいじゃない?」「だって、これごちそういれようと思ったのよ。」「いいじゃない?」「いやよ!」——どうやらこれは、交渉のかたがまずかったようだ——。そこで、「あら、それじゃあ悪いわねえ昌子ちゃん。あのね、宏子ちゃん、この人お隣にひっこしてきた桂木昌子さんです。どうぞよろしく、昌子さんはね、ひっこしてきたばかりでうちになんにもないのよ。少しお茶わんなんか貸してあげてね。」というと、「うん、貸してあげる。」宏子は急に気をよくして、どんどんさら茶わんを貸してくれる。昌子もきげんをなおして、せつせとお隣のおばさんになった。

考察 このころのけんかは、このような友だちあそびの方法の未熟さから起ってくることが多い。そのつどの解決で自然に理解していくものであろう。宏子は、世話ずきな性格でもあるので、このことが、ままごどあそびの興味をいっそうそそるようになったらしい。

△欠席していた友だちを迎えて喜ばせる。▽

五月二〇日(月)九時 曇 場所 帽子かけの前
その場の状況 豊はかぜをひいて三日ばかり休んでいた。クラスの子どもたちが五、六人登園した後、豊が来た。

事例 先に登園して、廊下をなんとなく歩いてきた克治が、豊の来るのを見つけた。「先生、豊ちゃんが来たよ。」というので、いっしょに迎えに行く。すると克治は豊の手をぐんぐん引いて帽子かけの所へ連れて行った。見ていると、「豊ちゃんのなまえ少し破れていたんだよ。だけど先生がおおしてくれたんだよ。」ききもさますはらしいニュースでも知らせるように、話しかけていた。

考察 前日、どうしたのか克治の名札が大きく破れていた。子どもの気持を傷つけないようにと思つて、私は「まあまあ、克治ちゃんのふね、どうして破れちゃったんでしょう。」と、いつて新しいのと取り替えた。すると、克治は、隣の豊のが少し破れているのを見つけて、「先生、豊ちゃんの黄色いふねも破れているよ。」

と、しきりに気にした。そこで「じゃあ豊ちゃんのもなおしてお
きましようね。」ということになり、子どもたちの下園後、豊の
をなおしておいたのだった。克治はきつと、この朝、自分の新し
い名札を見ながら、隣の豊のも新しくなったのに気づいていたの
であろう。そして、休んでいた豊を親しみといたわりの気持で迎
えたのではないか。

三「友だちと交わる」から

「グループにはいる」までの指導上の留意点

1、友だちとの交流の場・機会を多くする

友だちと積極的に遊ぶようになる、遊びに夢中になるあまり、
自己主張が強くなる。そして、友だちからきらわれ、悲しい思いを
したり、仲間はすれになることもある。このころには、活発な「け
んか」があとをたたない。しかし、この「けんか」を通して相手の
立場を意識するようになる。

このように、おおいに交わることによって、集団生活の地盤がで
きていくのである

△狼にさせられて困っている女兒▽

九月二〇日（金）晴 場所 屋上

その場の状況 全園児の遊びが最高潮である、前日私を交えて遊

んだ「狼ごっこ」に興味を持っていたのか、その遊びが始まった
ようす、今まで泣き顔を見せない春枝がべそをかく。

事例 私「どうしたの。」朝子「だってさ、狼になるからいれて
って、さ、はいったのよ。」ふじ子「そしたら、ちっともこわい
ことやらないの。」朝子「フーとも（家をたおすようす）ふかな
いしさ、つかまえにも来ないしさ……」ふじ子「春枝ちゃん、ず
るいわよ。」春枝とうとう泣きだした。

考察 春枝は、きのうとてもおもしろかった「狼ごっこ」にいれ
てもらったものの、姉さんかぶの春枝に狼の悪役が回ってきて
「いや」ともいえなかったのかもしれない。その上、責められて
は、ほんとうに悲しかっただろう。この年令ではむずかしい役だ
った。

その後 そこで話しあっていることばを真剣に聞く、そして、狼
になってもいれてもらいたかった春枝といっしょに狼になった。

もちろん春枝は狼の子どもになる。春枝はたんだん楽しそうに、
私のまねをしながら、後になり、先になりして狼の役をはたし
た。やがて狼もこぶたも手を取りあって、元気にへやにはいって
いった。

2、ルールが守れるように意図的に配慮する

友たちと楽しくおもしろく遊びたいという欲求から、遊びに子どもなりの、そばくなルールが生まれてくる。そのルールをたいせつにし、たやすく守ることができるよう、指導者は、きまりよく遊べる環境の設定をする。ときには、次のように年長児から、遊びのルールを教えられることもある。

△年長児にシャンケンをすることを教えられる。▽

六月二十六日(水)曇 場所 廊下

その場の状況 茂彦と秀吉が、ひとつの汽車をとりあいして、互いにゆずらない。無言のまま、険悪な状態になった。そこへ年長組の勇が通りかかった。

事例 勇はそれを見て、「そういうときは、シャンケンでもするんだよ。」ふたりとも夢中できこえない。勇はそばでみている。

私「ほくちたち、ゆりぐみの友だちのいうようにしないの？」ふたりはやっと気がついて勇の顔を見る。勇「そんなときはシャンケンするんだよ。」ふたりは「ああそうか」というように、すぐシャンケンする。

3、他を支配しようとする傾向のあるものを事前に指導する。

とくに自我意識が強く、攻撃的で目にあまる行動をするものは、放任すると横暴になりやすい。そこで、指導者としては、反抗心をかり立てるような、ことはつかいに注意したり、不満を発散させるなどの適切な個人指導をする。そして、友だちとのつながりが早く

円満になるようにする。

△「ほくのことおこるんたろう」と先生にいう。▽

一〇月一日(木)晴 場所 保育室

その場の状況 涉、むきになってひとつぶつ、二郎もたたく、涉だんだんはげしくふち返す、二郎泣きだす、ふたりは取っ組みあいになった。ものすごいきおいた。

事例 これは、と思ってなかにいった。涉「ほくのことおこるんでしょう。」わたしは、あっけにとられてしまった。あまりにも毎度のことなので、わたしと涉の間にそんなふんいきがあったことが恐ろしくなった。気をつけていたつもりでも語尾が強かったか、そんな印象があったのか私は反省した。しばらく声もださずふたりの顔を見つめてしまった。

その後の指導 「ちょっと、ここにきてこらんさい。」と鏡の前につれていった。もじもししながら、ふたりはついてきた。涉の顔は青白く、二郎はまっかな顔をして、力をいれて、鏡の中をのぞきこんだ。囲りに集まって来た友だちはクスクスと笑いだした。ここで気分転換をした。私「みんなでおすもう、しましよよ」とふたりを中心せず、すもうをする。この場合は「ほくのことおこるんでしょう。」のことばに對して、とりあげなかった。ことはのやりとりでなく、涉の気持のわだかまりを、取り去ってやりたいと思った。

4、友だちや小さいものの弱いものに対して。いたわりの気持をもたせる。

各自が安定して自己活動ができてくると、小さいもの弱いものをいたわり、困っている友だちを、助けようとする行動がみられる。

この貴重な心情のめばえを、じゅうぶんにとめて、困ったときは助け合い、うれしいときは、ともによこごぶという心情を豊かにしたいものである。

5、自主的につくったルールを守らせることによって自制心を養う。

遊びのなかで、多少もめるようなことがあっても、仲間どうしで解決させることが望ましい。与えられたルールよりも、自主的につくったルールの方が、より切実なものである。次の事例（野球による仲間づくりのきざし）のように、私に指摘されるよりも、遊び仲間から抗議されて、ルールのたいせつなことを休得する。このようなことの積み重ねによって、セルフコントロールができていくのである。また、視聴覚教材を通して、興味をもちながら、客観的な批判もでき、自分の行動をふりかえる余裕を与えることも、一方法である。

△野球による仲間づくりのきざし▽

六月二十九日（土）九時三〇分ごろ 晴 場所 屋上

その場の状況 暑い屋上、遊び者もまばら、野球をしようと五、六人が渉のあとに続いて行く。

事例 久「ぼくもいれてー渉」だめだよ、おまえなんか野球知らないんだろう、だからだめなんだよ。」と強く言う。しばらく、みんな顔を見合わせている。二郎「だから、ぼくたちに教えてくれればいいんだよ。」渉、ちよつとの間ひっくりした顔をしている。しかし、またあいかわらず「おい、正夫ちゃんこだよ。竜ちゃんこだよ。」と、自分のつごうのよいように守備陣をきめてゲームを始めた。

室内に集合してから、渉「久ちゃん、野球っておもしろいだろ。」「久「うんおもしろいね。」と話し合っているようすをみた。考察 野球については、家の近くの小学生といっしょに遊び、野球に興味をもっている渉には、だれもかなわない。しかし、みんなは野球をしようとす意欲がじゅうぶんある。渉はゲームをしながら、自己主張がすぎて、仲よしの友だちを失ないそうになり、あわてて、きげんをとっているようすがうかがえた。

その後の指導 野球ごっここのルールをきめよう話し合いをする。渉は本式のルールを知っているので、なかなかまとまらない。その後、全員でキャッチボールをして遊ぶ。野球をしたという気分を味わい、野球もみんなですることが楽しいことだと気づいたよ

うだ。

四「グループ意識をもつ」から「グループで

たのしく遊ぶ」とする」までの指導上の留意点

1、遊びの場を構成する

子どもたちは、遊びにあきるとサノサと移行してしまう。しかし、始終遊びを移行していたのでは、友だち同士の交流ができず、びを持続させるためには、まず子どものひとりひとりが、遊びに没頭できるように配慮しなければならない。

次の事例の「積木をじゅうぶんに使ってなかよく遊ぶ」は、その点を、物的環境を設定することによって、子どもの意欲をみだし、友だち同士の交流へ導いた例である。

そしてまた、友だち同士のふんい気が、「あと片づけをする」という生活習慣も、遊びの一貫として、みんなでたのしくさせることができた、ということも見のがせない。

△積木をじゅうぶんに使ってなかよく遊ぶ。▽

一〇月九日（木）星 場所 保育室

その場の状況 登園すると間もなく、治夫、行夫、わたるらが、汽

車や電車を走らせ、小型積木で車庫などを作って遊び始める。机の下をくぐってはトンネルにしている。そのうち、信秀、真一、文雄、太郎らも、おいおい加わり、場所がせまくなってくる。

机をいくつか片つけて場所を広げる。また、小型積木では、遊びの規模が小さいので、普段あまり使われていない床上積木をひと箱、ザラツと床にあげて、さあ、駅でも作ってちょうだい。」と声をかける。ワーンと寄って来てたちまちひと箱分は使い果され、少しばかり獲得して、不満げな顔をしている者もいるので、すぐに隣のクラスへ行ってふた箱借りて来る。

こんどは、それ三れがじゅうぶんに積木を使って思い思いに、鉄橋や駅、線路などを作り、互いに交流をはじめめる。そして約五〇分くらい、へやいっぱいに広げてよく遊んだ。遊びのあと、みな気持よくたちまちのうちに片つけた

考察 この年令で、五〇分もの長時間、友だち同士の争いもなく互いに交流しながら遊べたのは、遊具をじゅうぶんに補充したことも一原因と思う。

2、友だちに接する態度を養う

友だちに接する態度は、もつとも社会的、かつ基本的なものである。友だちに対してどのような態度をとらなくてはならないか、幼児なりに納得して、努力する態度を、折にふれて指導することがた

いせつである。事例「友だちに誘われたときは、遊んであげよう」は、子どもなりに社会的態度のよしあしを批判させ、この目的をねらった一例である。

△友だちに誘われたときは、遊んであげよう。▽

一〇月二日(木) 九時二〇分 曇 場所 保育室

その場の状況 自由遊びが低調で、発展しない日である。自分から友だちのなかへはいれない知子を、だれに遊んで貰うかと物色していた。

事例 重子に「知子ちゃんと遊んでくれない?」と頼むと「いいわ。」と口で廊下へ連れて行き、ごきを連んだりして、ままごを始めたらしい。そのうち重子、もどって来ると「先生、ふたりだけじゃつまないわ。」と「言う、さうお、じゃあ直子ちゃんに遊びましようって、言っでごらんない。」重子、直子に「言うが、返事は、「いや。」とはっきりしている。重子「いやだつて。」ともどって来る。「じゃあ藤子ちゃんに頼んでごらんない。」藤子もいや、と言う。次は八重子、これもため。花子のところへ行つて、やつと「いいわ。」と承諾。それから遊びが発展して仲間もふえた。

その後の指導 全員集合して話し合いをするとき、上記のときのことをそのまま話すと、重子が何回もことわられるところが、ちょうど、繰り返しのある童話をきくように、おもしろかったのか、興

味をもってよく聞いた。最後に「おともだちが、遊びましようって言ったら、遊んであげましようね。」「花子ちゃんは、とても親切だから遊んでくれたのね。花子ちゃん、どうもありがとう。」「とみんなの前で礼を言う。翌朝、知子がいつもより早く登園して、すぐ花子と結びつく。

3、達成したよろこびと、次への意欲をもたせる

大ぜいの男女がいっしょになって遊びに没頭できる姿は、常に望ましいと思う。それで、その後の指導にもあるように、自分たちがたのしく遊んだこと、じょうずに遊べたことを認識させ、またこの次も「このようにうまく遊ぼう」という意欲をもたせる。

達成した喜びと、次への意欲をもたせることは、いつの場合でも必要なことである。

4、グループのメンバーを、意図的に構成する

日ごろの遊びの状態や、ソシオメトリーによって、交友関係の実態を知り、性格、個性、勢力関係ともからみ合わせて、意図的にグループのメンバーを構成する。それぞれが、好感をもち合っていることにより、自己活動をしゅうぶんにしながら、グループの活動を盛りあげることができると思う。

5、計画的指導によるグループ活動を、繰り返し経験させる

次の事例の「おうちごっこをはじめよう」のように、教師の計画指導によるグループ活動を、何回もくり返し経験しているうちに、大ぜいで遊ぶことの楽しさを知る。それとともに、グループで話し合いをする、目的や計画をたてる、役の交替をする、仕事の分担をする、などの集団における態度や技術を、自然に身につけ、適当に自己を抑制して、協調しながら遊べるようになる。

そしてまた、集団の中でたのしく遊べるといふ基本的態度が身についてこそ、「ともによるごっこ」心を理解し、やがて「ともによるごっこ」あえる一人間に育つものと思う。

△おうちごっこをはじめよう▽

六月一三日(木)・〇時二〇分 曇 場所 保育室

その場の状況 本日、おうちごっこをはじめめる前に、導入段階として四、五日前から、自分の家庭や、家人の仕事の役割など、いろいろと家庭に関心をもつような経験をさせてきている。

事例 これからみんなで「おうちごっこ」をしようと言ひ合いをする。

「だれにおとうさんになってもらおうかしら？」「だれちゃんがいい」「だれがいい」と子どもたちの声ができるが、からだの大きいことを理由に、ある程度リーダーになれる者を数名選ぶ。おとうさんは、すきな女児をおかあさんとしてよぶ。ふたりで相談し

て、おにいさんをよぶ。三人で相談しておねえさんをよぶ。というように数を増し、互、六名のグループに分ける。

こんどは、「それぞれにすきな家を作ろう」とよびかけると、みんな張り切って働き、言い合いをしながらも、大積木やごぎを使って、自分たちの家を作る。

おかあさんをよんで、ままごと道具を公平に分ける。

その後は自由に活動させ、ようすをみる。

考察 クラス全体がひとつのふんい気に包まれ、騒然となつてしまったので、日ごろ、ままごととは縁のない男児もいやぶなくおとうさんの役割を演じ、いつもは、おかあさん役になかなかない者が、おかあさんになっていたり、また、グループのメンバーも自分たちで選定しているので、調子よく活動できたようである。

その後の指導 翌日は、おとうさん、おかあさん役を交替させる。

指導 昨日も、きょうもおかあさんがいい、という者もいるが……やがて、かいものごっこへ発展させる。